

中国古典文学大系 8

平凡社

抱朴子

本田濟 訳

列仙伝・神仙伝

沢田瑞穂 訳

山海経

高馬三良 訳

訳者紹介

^{ほんだ わたる}
本田 済 1920年三重県伊勢市生。京都大学文学部卒。梅花女子大学教授。専攻 中国哲学。主要訳著書『易学——成立と展開』（平楽寺書店）『易』（朝日新聞社・中国古典選）『漢書・後漢書・三国志列伝選』（平凡社・中国古典文学大系）

^{きたみずほ}
沢田瑞穂 1912年高知県生。国学院大学高等師範部卒。早稲田大学教授。専攻 中国文学。主要訳著書『地獄変』（法蔵館）『校注破邪詳弁』（道教刊行会）『仏教と中国文学』（国書刊行会）『増補宝巻の研究』（同）『中国の昔話』（三弥井書店）

^{こうまみよし}
高黒三良 1911年兵庫県生。京都大学中国語中国文学科卒。松蔭女子学院大学教授。専攻 中国文学。主要訳著書「原始山海経」「古代の神々」（大阪女子大学紀要）

中国古典文学大系 全60巻

抱朴子・列仙伝・神仙伝・山海経

第8巻

1969年9月12日 初版第1刷発行

1983年6月15日 初版第13刷発行

定価 2,700円

訳者 本 田 済
高 馬 瑞 穂
三 良

東京都千代田区三番町5番地

発行者 下 中 邦 彦

発行所 郵便番号 102
東京都千代田区 株式会社 平 凡 社
三番町5番地
振替・東京8-29639

不良本のお取換えは直接読者サービス係まで 印刷 東洋印刷株式会社
お送り下さい（送料は小社で負担します）。 製本 株式会社 石津製本所

© 株式会社 平凡社 1969 Printed in Japan

目次

抱朴子 內篇

序……………三

卷一 暢玄……………四

卷二 論仙……………七

卷三 對俗……………七

卷四 金丹……………一三

卷五 至理……………一〇

卷六 微旨……………一〇

卷七 塞難……………一六

卷八 積滯……………一六

卷九 道意(抄)……………一三

卷十 明本(抄)……………一三

卷十一 仙藥(抄)……………一六

卷十二 弁問(抄)……………一六

抱朴子 外篇

卷一 嘉遯……………一六

卷二 逸民……………一〇三

卷三 勸學……………一〇九

卷四 崇教……………一三

卷五 君道……………一六

卷六 臣節……………一四

卷七 良規……………一七

卷八 時難……………一〇

卷九 官理……………一三

卷十 務正……………一三

卷十三 極言(抄)……………一七

卷十四 勤求……………一七

卷十五 雜處(抄)……………一七

卷十六 黃白(抄)……………一八

卷十七 登涉(抄)……………一〇

卷十八 地真(抄)……………一六

卷十九 遐覽(抄)……………一六

卷二十 祛惑(抄)……………一六

卷十一	貴賢	一三三	卷三十	鈞世	一七九
卷十二	任能	一三五	卷三十一	省煩	一九九
卷十三	欽士	一三五	卷三十二	尚博	二〇一
卷十四	用刑	一三五	卷三十三	漢過	二〇五
卷十五	審拳	一四四	卷三十四	吳失	二〇七
卷十六	交際	一五〇	卷三十五	守堵	二一〇
卷十七	備闕	一五二	卷三十六	安貧	二一四
卷十八	擢才	一五七	卷三十七	仁明	二一七
卷十九	任命	一五九	卷三十八	博喻	二二〇
卷二十	名實	一六三	卷三十九	広譬	二二七
卷二十一	清鹽	一六六	卷四十	辭義	二五二
卷二十二	行品	一六九	卷四十一	循本	二五四
卷二十三	弭訟	一七四	卷四十二	応嘲	二五五
卷二十四	酒誠	一七六	卷四十三	喻蔽	二五七
卷二十五	疾謬	一八三	卷四十四	百家	二五九
卷二十六	譏惑	一八九	卷四十五	文行	二六〇
卷二十七	刺驕	一九一	卷四十六	正郭	二六三
卷二十八	百里	一九五	卷四十七	彈禰	二六六
卷二十九	接疏	一九七	卷四十八	詰鮑	二六九

卷四十九 知止……………三六一

窮達……………三六四

重言……………三六六

卷五十 自叙……………三六八

列仙伝

卷上

赤松子……………三〇一

甯封子……………三〇一

馬師皇……………三〇一

赤将子輿……………三〇一

黄帝……………三〇三

偃佺……………三〇四

容成公……………三〇四

方回……………三〇五

老子……………三〇五

関令尹……………三〇六

涓子……………三〇六

吕尚……………三〇七

嘯父……………三〇八

師門……………三〇八

務光……………三〇九

仇生……………三〇九

彭祖……………三〇九

叩疏……………三一〇

介子推……………三一〇

馬丹……………三一一

平常生……………三一一

陸通……………三一一

葛由……………三一一

江妃二女……………三一二

范蠡……………三二四

琴高……………三二四

寇先……………三二五

王子喬……………三二六

幼伯子……………三二六

安期先生	三六
桂父	三七
瑕丘仲	三八
酒客	三八
任光	三九
蕭史	三九
祝鷄翁	三〇
朱仲	三〇
修羊公	三一
稷丘君	三一
崔文子	三一
〔補〕羨門	三一
〔補〕老萊子	三一
卷下	
赤須子	三四
東方朔	三四
鈎翼夫人	三五
犢子	三五
騎竜鳴	三六

主柱	三六
園客	三七
鹿皮公	三七
昌容	三八
谿父	三八
山凶	三八
谷春	三九
陰生	三九
毛女	三〇
子英	三〇
服閭	三一
文賓	三一
商丘子胥	三一
子主	三一
陶安公	三一
赤斧	三一
呼子先	三一
負局先生	三一
朱璜	三四

黃阮丘……………三三

女几……………三三

陵陽子明……………三三

邗子……………三三

木羽……………三七

玄俗……………三七

〔補〕劉安……………三八

列仙伝叙……………三九

神仙伝

神仙伝序……………三四

卷一

広成子……………三四

老子……………三五

彭祖……………三〇

魏伯陽……………三四

卷二

白石先生……………三五

黃初平……………三六

王遠……………三七

伯山甫……………三八

馬鳴生……………三二

李八百……………三三

李阿……………三四

卷三

河上公……………三五

劉根……………三六

李仲甫……………三九

李意期……………三九

王興……………三〇

趙瞿……………三二

王遙……………三三

李常在……………三五

卷四

劉安……………三四

陰長生……………三八

張道陵……………三〇

卷五

泰山老父……………三六

巫炎……………三八

劉憑……………三五

樂巴……………三七

左慈……………三九

壺公……………三九

薊子訓……………三五

卷六

李少君……………三六

孔元方……………三八

王烈……………三九

焦先……………四〇

孫登……………四〇

呂文敬……………四〇

沈建……………四〇

董奉……………四〇

卷七

太玄女……………四七

西河少女……………四八

程偉の妻……………四八

麻姑……………四九

樊夫人……………四〇

嚴清……………四一

帛和……………四二

東陵聖母……………四二

葛玄……………四三

卷八

鳳綱……………四七

衛叔卿……………四七

墨子……………四九

孫博……………四一

天門子……………四三

玉子……………四三

沈羲……………四三

陳安世……………四三

劉政……………四三

卷九

茅君.....四七

孔安国.....四八

尹軌.....四九

介象.....五〇

蘇仙公.....五一

成仙公.....五二

郭璞.....五三

尹思.....五四

卷十

沈文泰.....五八

涉正.....五八

皇化.....五九

北極子.....五九

李修.....五九

柳融.....六〇

葛越.....六〇

陳永伯.....六〇

董仲君.....六一

王仲都.....六一

離明.....六二

劉京.....六二

清平吉.....六三

黃山君.....六三

靈壽光.....六三

李根.....六四

黃敬.....六四

甘始.....六五

平仲節.....六五

宮嵩.....六六

王真.....六七

陳長.....六七

班孟.....六八

董子陽.....六八

東郭延.....六九

戴孟.....六九

魯女生.....六九

陳子皇.....七〇

封 衡…………… 四〇〇

山海經

山海經序…………… 四〇五

第一 南山經…………… 四〇六

第二 西山經…………… 四〇六

第三 北山經…………… 四〇七

第四 東山經…………… 四〇七

第五 中山經…………… 四〇七

第六 海外南經…………… 四〇九

第七 海外西經…………… 四〇九

第八 海外北經…………… 四〇九

第九 海外東經…………… 四〇九

第十 海內南經…………… 四〇九

第十一 海內西經…………… 四〇九

第十二 海內北經…………… 四〇九

第十三 海內東經…………… 四〇九

第十四 大荒東經…………… 四〇七

第十五 大荒南經…………… 四〇九

第十六 大荒西經…………… 四〇一

第十七 大荒北經…………… 四〇三

第十八 海內經…………… 四〇五

山海經原書插圖…………… 四〇九

解 說…………… 四〇七

抱^ほ

朴^ぼ

子^し

本^{ほん} 葛^{くわ}

田^だ

濟^{たい} 洪^{ほう}

訳 著

抱朴子 内篇

序

わたくし葛洪は、生まれつきとびぬけた才があるわけでもない上に、たまたま『老子』のいわゆる無為の道が好きだった。だから、たとえ青空をのいで飛べるほどの強い翼、風を追い光に追いつくほどの速い足があったとしても、やはり鸚鵡の群のなかに強い翼をたたみ、びっこの驢馬の仲間として速い足を隠していたい。

まして、かの大地は私にありふれた短い羽しか付けてくれず、造物主は私に至ってのろいびっこの足しか与えてくれなかったものだ。思うに自分で自分の将来を占ってものはっきりしている。能のない者はあくせくしないがよい。どうして蠅ほどの翼を奮って天まで飛び上がろうとしたり、びっこのすっぽんのような足に鞭うって兎の跡を追ったり、嫫母(貧帝の妻、醜女の代表)のような醜い姿を飾り立てて仲人の空世辞を期待したり、石ころ同様の安物の品を自賛して宝石店に千金を要求したりできよう?

大体が侏儒ほどの足で夸父(神話中の巨人、太陽と競走して渴き死んだ)に追いつこうと背伸びするから、凡庸人はつまずくのである。要離(春秋呉の人、公子慶忌の暗殺を引き受け、舟中で斬りかかったが、逆に江に投げこまれた)、『呂氏春秋』忠應)ほどの瘦せ腕で鼎をもちあげようと無理をするから、秦王のように足の筋を切ったりするのである(秦の武王

は力自慢で鼎をもちあげようとして足の筋を切り、それで死んだ、『史記』秦本紀)。

そこで私は出世の道には望みを絶ち、貧窮の境涯に甘んじることにした。あかざ・豆の葉の汁にも八珍(塩辛をのせた米飯・塩辛をのせた黍飯・焼豚・焼羊・挽き肉・漬け物・煎り物・麩物)の味があり、よもぎの戸いばらの門にも数奇をこらした美邸の安楽がある。それで権力者の家には、目と鼻の先でも行かない。道を知る士のところには、いくら遠くても必ず訪れる。

今までに読んだ珍しい書物、その数は少なくない。大抵隱語が多くて俄には理解しにくい。よほど精密な頭脳でないし探求できないし、よほど努力せねば全部を読み尽くせない。道士のなかでも、奥深く博識な人はまれで、臆断でいいかげんなことをいう者が多い。だから時に好事家があって、仙道修行に志しても、誰についてよいか、俄には知れない。心に疑うところがあっても質問する相手が無い。

今、この書物を著わして、あらあら不老長生の筋道を示す。最も微妙なところは筆紙には述べられない。ざっと概略だけを述べ、一端を示したつもりである。自分で発憤して勉強しようという人なら、これを読めば大体のところはつかめるであろう。私ごとく暗愚な者が微妙深遠の域を極め尽くし得たとは言わない。ただ多少世間の人より先に悟ったところがある、それを論じてみただけである。

世間の儒者は、ただ周公・孔子を拳々膜服することしか知らない。人間はすべて死ぬものだという固定觀念から脱けられないでいる。だれも神仙のことを信じないで、眉唾ものの説だという。私のこの書物を見たら、大笑いするばかりでなく、正しい本道の道を誹謗するであろう。それ故に、これを私の著わした『抱朴子』の篇数の中には入れずに、別に一部の書物とする。名づけて『内篇』という。全部で二十

卷。『外篇』とともに、それぞれ篇目の次第を立ててある。

名山や石の室におさめるほどの作品ではないが、『史記』自序に、これを名山に蔵すとある、金縛りの櫃に封じて、識者にだけ見せ、話にならぬ人々には見せまいと思う。後世の不老長生を志す人にとって、この書物が迷いの雲を晴らす助けになれば幸いである。信じない人に、信じてくれと頼む気は毛頭ない。

右、謹んで序文とする。

注

一 先に悟ったところ 原文は「聊論其所先覺耳」。原注に、或るテキストでは先覺が先覺者になっているといい、『言書』葛洪伝の引用もそうなっている。今、先覺者に改めて訳した。

巻一 暢ちやうげん 玄 玄の意味を敷衍する

抱朴子が言う、

玄(くろい)色の意であるが、『老子』などは天地以前の實在の意味に用いるとは自然の始祖、万物の生まれ出る大本である。ぼんやりと暗く見えるほどに深い。だから「微」とよばれる。ぼおっと霞むほどに遠い。だから「妙」とよばれる。

その高さは九天を蔽い、その広さは八方を包みこめる。日月よりも輝かしく、稻妻より早い。時にはキラリとして光のように行き、時にはビュービューと星のように流れる。時にはひろびろと淵のように澄み、時にはひらひらと雲のように浮かぶ。

玄は、形ある万物によって「有」となり、静寂に身を託するときは「無」となる。下に沈めば幽冥界深くひそみ、上に浮けば北極星をもしのぐ。金石もその剛さには比べられず、落ちる露もその柔さには及ばない。四角いようで定規にはかからず、円いようでぶんまわしにはまらない。来ても見えず、去れば追いつけない。

天はこの玄によって高く、地はこれによって低い。雲はこれによって飛び、雨はこれによって降る。玄は唯一実在を内に孕み、それが陰陽の面籟として展開する。その呼吸は生命の源、鍛冶屋の鑪と同様、億方の物を鑄出す。二十八宿(星座)を天にめぐらせ、最初の世界を造り成す。時間という神秘的な機械に鞭うち、四季の気を呼吸とする。隠れているときは虚無静寂、ひろがるときは突然たる文を現わす。大河の流れを酌んで、濁りを抑え清い波を揚げる。ふやしても溢れることはなく、そこからいくら汲み取ってもなくなりはない。何かを与

えられても有難がらず、何かを奪われても悲しまない。だから玄がここにあれば、その楽しみは無窮。玄がなくなれば、肉体は崩れ、精神は飛び去る。

そもそも五音(宮・商・角・徵・羽の五音階)・八音(一年の八つの風の音による律調)、すなわち清い商の音、流れる徵の音は、自然な耳をそこなうものである。鮮かに艶やかな色、入り乱れまぶしい模様は、天然の目を傷つけるものである。「老子」による。だから遊びや、澄んで芳しい酒は、本来の心を乱すものである。あでになまめいた容姿、白粉でよそおった白い肌は、寿命を伐る斧である。「呂氏春秋」貴生。

それに引きかえ、玄の道だけは、それにそって永遠の生をはかり得る。玄の道を知らぬ者は、たとえ、その一顧一眄が民の生殺を司り、その一言が國の興亡の鍵となり、高殿は雲より高くそびえ、美室は紅と緑が入り乱れ、組み紐の几帳は霧のように垂れこめ、薄絹のカーテンは雲のように開き、美女は深閨に居ならば、金杯は華やかに行き交い、絃楽器はジャンジャンと合奏され、舞姫はクネクネともつれ合い、簫の音は霞の上まで響き、羽根で作った天蓋は湖の上に浮かび、蘭の園に芳しい花をつみ、真珠の池に紅い花びらを弄び、高山に登っては遠くを眺めて愛いを忘れ、深淵に臨んでは魚を釣って空腹をみたし、入っては輝かしい門内に宴遊し、出でては朱塗りの馬車を運んで駆けよるような生活をしていても、楽しみが極まれば悲しみが忍びより、満つれば欠けるのが世の習い。だから一曲が終われば溜め息が出、宴會が果てれば心寂しくなるのである。これはまことに当然の勢いで、影が形に添うようなものである。あの華やかなものは仮りの姿、本物でない。だから一旦過ぎ去れば忽ちに忘れられる。

一体、玄道とは、これを悟得するのは内心。これを見失わせるのは外物。これを作用させるのは精神。これを忘れさせるのは肉体。右は

玄道を志す者の要諦である。

玄道を悟得した者は貴い。黄金の鉞(権力の象徴)の威光はなくとも。玄道を身につけた者は富んでいる。珍しい宝物は持たずとも。その高さはよじ登れぬほど。その深さは測れぬほど。流れる光に乗り、飛ぶ日ざしに鞭うち、大空をしのぎ、大地を貫き、無限の高みに登り、無限の深みにもぐる。ひろびろした門を過ぎ、はるかな野に遊ぶ。不可視の世界に逍遙し、大いなる混沌の外にさまよう。雲の上に丹粟を飲み、赤い霞のなかに空気を噛む。茫漠の境に徘徊し、微妙の世界に天翔ける。虹の橋を渡り、日月星をふむ。これが玄道を悟得した人である。

その次は真に足ることを知る者。足ることを知る人は、悠然と隠遁して人に使われず、山林に寿命を養い、鳳凰の翼を身分賤しい仲間(隠し、浩然の氣を茅屋のうちに養う。ぼろ衣に繩の帯、それでも華やかな袷(天子の朝服)に取り換えたいとは思わない。竹を杖に柴を背負って歩く、それでも四頭立ての馬車の行列に換えたいとは思わない。夜光の珠のような光を嵩山(五嶽の二)の山峽に隠し、他の山の石で切られ擦られる(他人に穿撃される)ことのないようにする。未来を知る龜の甲羅を深淵に沈め、穴をあけられ焼火箸をあてられる災難を逃れる(占いは龜の甲に雖も穴をあけ焼火箸をもみこんでひび割れを作り、その形で占う)。動くことをやめ、知恵をとざし、どんな境涯にも満足している。

華やかな、朝咲いて夕に凋れる花を捨て、車の顛覆する、険しい路を避ける。青い崖の間に吟じ囁けば、万物は塵埃と化する。こんもりした樹の下に顔をほころばせれば、朱塗りの門もあばら屋と変わる。鉞を手に広い田に降り立てば、貴人の旗差物は忽ち敗者のもつ鞭のようになくだらぬものとなる。粟を噛み、泉に口すすげば、富豪の牛・羊・

隊の御馳走もまるであかぎ・豆の葉のようにまずいものとなる。

無作為の心境ともなれば、泰然として有り余る喜びがある。人と競争しないという立場に立てば、平然として出世も不遇も同じと観ぜられる。純粹さを保ち、生まれたままを守り、欲もなく憂いもない。天真を全うし、形骸を忘れ、恬淡の境における。ガランとして広い。まるで大混沌と同じ性質。果てもなく茫々としている。造化と等しい生き方。暗いようでもあり明るいようでもある。濁っているようでもあり清いようでもある。遅いようでも速く、欠けているようでも満ちている。

料理番が無能だからといって、神主が私子を投げ捨て、樽や俎板をとびこえて、代わりに出るようなまねはしない。『莊子』逍遙遊。政治家が無能だからといって代わらうとはしない。下手な大工が手を怪我したからといって、すぐれた棟梁が持ち場を離れ、繩墨を捨てて手伝うようなまねはしない。『老子』。『孟子』。尽心上。自然の造化にまかせるべきところにさかしらな手伝いはしない。些細な祿利のために凡夫のように一喜一憂しない。茫洋として、世間が褒めても喜ばない。淡々として、口を揃えての非難にもめげない。外界の物質によって精神を乱すことはなく、利害によって純粹さを汚すことはない。

だから最高の富貴も、この人を誘惑するには足りない。その他の物がどうしてこの人を悦ばせられよう？ 長い刀、沸き立つ大釜も、この人を脅すには足りない。悪口がどうしてこの人を悲しませられよう？ 常にもろもろの煩惱に無関心で、物と同じ次元にたつことは絶対にはない。

隋侯の珠(昔の名玉)を彈丸にして雀を狙い(一つしかない命をつまらぬ祿利に賭ける)、秦王の痔をなめて車五台をもらい、『莊子』列禦寇。秦王が病氣になった。できものををつぶした医者は一車、痔をなめて治した医者は車五台もらった。腐った繩にすがって鳥の巢を探り、呂梁の滝(江蘇

省銅山泉)を泳いで魚をとる。そのような汚辱と危険を冒して、朝には諸侯の客となり、夕には狐や鳥の餌食になる。身のほど過ぎた重荷を背負ったばかりにひっくりかえり、溺れて助からなかったのだ。右は、世人が狂奔して欲しがる境涯であるが、達人はそれを見てゾーッと胆を冷やす。

そこで最もすぐれた人物は、韶(舜の音楽)・大夏(禹の音楽)のような妙音をかくし、藻稅(飾りあるうたつ)のようなあやを包む。六本の大羽根を崑崙山(仙人が住む)の上に奮うから、いぐるみを防ぐために葦の葉をくわえる要はない(雁がそとする。『淮南子』脩務訓)。竜の鱗と角を隠して世に出ないから、槍で突かれぬようトンネルを曲げておく備えもいらぬ(むじながそうする。同上)。腐った鼠(祿利のたとえ)を大事に足でおさえ、通りすがりの靈鳥におどしの叫びをあげたとんび『莊子』秋水)のように、いらぬ心配をすることもない。空高く昇りつめて降りるに降りられなくなった竜の後侮(『易』乾卦)もない。

この人を見知った者はだれもない。ああ、なんと遙かに遠いところにいるものかな！

注

- 一 これを悟得するのは、原文は「得之乎内。守之者外」であるが、校勘記によって「得之者内。失之者外」と改めて訳した。
- 二 身分賤しい仲間。原文は「細分之伍」であるが、継昌の校語により、分を介に改めて解した。
- 三 粟。原文では莩。茶の老葉でおかしい。校語に、或るテキストでは粟に「なつて」と。
- 四 私子。原文は「委戸祝之塵」で、「秋大匠之位」と対になっているが、塵ではいかにも通じがたい。意を以て塵を塵に改めて解した。